（第３種郵便物認可）　奈良新聞記事　２０２３・０３・10

人生100年 健やかに生きる

～体育・スポーツとともに～ ⑤

スポーツと遊び

楽しいから「頑張れる」

NPO法人　ならスポーツクラブ理事長
北　良夫（91）

戦後間もない1949（昭和24）年の夏、橿原陸上競技場において、第33回日本陸上競技選手権大会が開催され、誘われて大会を観戦した。小学校の運動会しか知らなかった当時、初めて見た1周400㍍の競技場や、周囲を取り囲む観覧席に目を見張った。

印象的だったのは、競技場でカラフルなユニホーム、スパイクを履いた選手が走り、跳び、投げる姿。それを見て、「自分もこんなところで走ってみたい」との思いをかき立てられた。これがきっかけとなって、大学では迷うことなく陸上競技部に入り、練習に取り組んだ。

入学後間もない夏、憧れていた橿原陸上競技場で、第20回日本学生陸上競技選手権大会が開催され、出場のチャンスを得た。三段跳びと400㍍リレーの第3走者として出場。当時の光景は成績の結果と共に、昨今見られなくなった土の競技場が懐かしくよみがえる。

橿原陸上競技場は1940（同15）年、120万人ともいわれる全国からの建国奉仕隊によって建設された運動場が戦後整備されたもので、全国から集う若者たちの活動の場として、よみがえったのは素晴らしいこと。私自身もこの競技場での出逢（あ）いがあって、70有余年、今もマスターズ陸上の競技者として、走り続けられることの幸せをかみしめている。

大学時代の恩師、近藤英男先生は、若い頃には日本を代表するほどのアスリートであったが、病のため競技を断念されている。放課後よくグラウンドに顔を出されて陸上競技の指導を受けた。

当時、私たちの時代にとっては、憧れの人だったオリンピック金メダリスト、織田幹雄、南部忠平、田島直人氏らとはお付き合いもあり、練習後には彼らのエピソードをよく聴いた。田島直人氏が語ったという「スポーツは所詮（しょせん）遊び、だから楽しくなければならない」という話。当時は記録・勝敗にこだわり、夢中になっていた現役時代、「スポーツが遊び」との意味が理解できなくて、聞き流していた。

その後、奈良市のゲートボール大会で、仲間から執ようにいじめられた人が自殺するという事件が報じられたことがあった。スポーツをする仲間同士のいじめが、招いた悲劇と痛々しく思った。

その記事について後日先生から、「これは遊び感覚でスポーツができない、日本人の引き起こした典型的な事件だ」と伺った。田島氏の言葉には続きがあった。「スポーツは楽しいから、少々つらいことでも頑張れるのだ」と。

91歳を迎えて今も続けられるスポーツ。田島氏の言葉が、ようやく理解できるようになった。36年の教員生活が終わって、迎えた「還暦」のお祝いに、先生から頂いた揮毫（きごう）「遊」の色紙は、今も大切に飾ってある。

＝第2、4金曜日掲載予定＝

1951年、大学生の時、三段跳び競技中の筆者。会場は当時の橿原陸上競技場（本人提供）

◇

【お知らせ】5月6日、奈良市鴻ノ池陸上競技場で、第14回50㍍ダッシュ王選手権大会を開催します。ぜひご参加ください。（詳細は「ならスポーツクラブ」ホームページから）